



大腸肛門病センター50周年を迎えて

佐原力三郎（副院長兼大腸肛門病センター長）

1960年（昭和35年）2月、前身である「肛門センター」が開設されました。新宿区大久保にあった旧病院でのことです。世間では日米新安保条約が調印され、カラーテレビの放送が始まったころでした。初代センター長であった隅越幸男先生が、「外科診療の一角に肛門出血を主訴とする患者さんを集めてみよう!」という発想から立ち上げ、診療を開始しました。当時肛門診療と言えば民間療法や開業医の守備範囲であり、総合病院の中に「センター」として診療する形態は特殊だったようです。この年の肛門疾患手術件数は100を漸く超える数でした。



3年後の1963年に「肛門病センター」と改称し、1965年（昭和40年）には外科から分離し「肛門科」として院内で独立しました。隅越部長一人の肛門科でしたが、手術や診療の手伝いは外科のスタッフが兼ねる形でした。この間に手術件数は400件を超えるようになり、その後もうなぎ登りのかたちで増えていきました。メディアが幾度となく取り上げる機会も得て、その都度よい反響から外来患者さんや手術件数が増えていきました。

1975年（昭和50年）には年間手術件数1,000例を超えました。肛門の症状や便の異常を訴える患者さんの中には大腸疾患の方も少なくなく、大腸癌や炎症性腸疾患などの症例数もそれにつれて多くなっていきました。肛門疾患と全身疾患、特に大腸疾患との関連は非常に密接であり、肛門と大腸を切り離すことはできないという思いから、この年「大腸肛門病センター」と現在の名称となりました。

患者さんの希望に寄り添う

現在、臨床診療では、肛門疾患、大腸癌、炎症性腸疾患、大腸肛門機能性疾患の4本立てをこのセンターの使命と考えています。肛門疾患手術では、良性疾患であるための治療適応と患者さんのニーズを十分考慮したうえで、根治性と肛門機能温存を両立できる up to date な各種の手技を提供しています。また、以前は「たかが肛門」と全身の合併症があるため治療を断念せざるを得なかった患者さんに対しても、総合病院であるがために、安全に治療を提供できるようになりました。外来日帰り手術、短期間（2泊3日～6泊7日）の入院手術、全身麻酔下での手術も、治療方法や患者さんの希望にも合わせて施行しております。今まで一人で悩んでいた症状についても、大きな一歩を踏み出して相談してください。

大腸肛門病センター50年の歴史は国内に類を見ないものですが、今後も引き続きこの分野の最先端を走り続ける所存です。この場をかりて感謝の念を表すとともに、これまで以上のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます次第です。

大腸肛門病センター2010年度の実績

- ・年間初来患者数 4,853人
- ・紹介患者数 2,603人(53.6%)
- ・紹介元施設数 856施設
(年間5症例以上の紹介:129施設)
- ・肛門疾患手術件数 2,090件
- ・総手術数(癌, IBD含) 2,519件
- ・大腸内視鏡(内視鏡センター) 5,063件
- ・注腸造影検査 384件
- ・機能検査・治療症例数 823件
- ・ストーマ外来患者数(延べ) 1,490人